Association of Disability Sciences, Japan

障害科学研究, 35, 7－18, 2011

原　著

弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果について

相羽　大輔*・河内　清彦**

本研究は弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果を検討することを目的とした。参加者は280名の健常学生で，弱視学生のプロフィールを提示した後，弱視学生に必要な援助内容（移動や読み書き）に基づく項目からなる援助要請質問紙に回答を求めた。因子分析の結果，援助内容は移動援助・読み援助・代筆援助の3因子に区別され，弱視学生に対する健常学生の援助意識構造が一次元的でないことが明らかとなった。援助内容別に性別・接触経験・希望職種の要因に基づく多元配置分散分析を行った結果，どの援助内容においても，男子よりも女子が，また，視覚障害者との接触経験者はそうでない者より援助しやすいことが見出された。これに対し，支援職希望者はそうでない者より個人情報の扱いを要する代筆援助で援助しやすいことが見出されており，援助内容別に健常学生の援助遂行可能性を検討する必要性のあることが指摘された。

キー・ワード：障害開示　援助要請　弱視学生　健常学生

Ⅰ．問題と目的

弱視学生が周囲の健常学生と良好な交友関係を築き，大学生活を円滑に送るためには，弱視学生が周囲に対して見た目ではわかりにくい弱視という障害を説明すること，すなわち，障害開示が重要であると指摘されてきた（相羽・河内, 印刷中; Fichten, Lennox, Robillard, Wright, Sabourin, & Amsel, 1996; Huvelle, Budoff, & Arnholz, 1984; Madaus, Foley, McGuire, & Ruban, 2002; 弱視者問題研究会, 2009; Glover-Graf, Janikowski, & Hadley, 2003; Roberts & Macan, 2006; 山口, 2007）。特に，弱視学生が初対面の健常学生に障害開示をする場合は，健常学生は弱視学生から障害を隠されるよりも開示された方が交流しやすく，弱視学生が健常学生と一緒に行動ができるという内容を障害開示に含めるほど，その効果は増大するということが見出されている（相羽・河内, 印刷中）。このため，弱視学生が健常学生と交流する際には，健常学生と一緒に行動ができる部分を強調した障害開示を積極的に行うことが重要である。

一方，実際には弱視学生は少なからず健常学生と同様に行動ができない部分を持っているため，彼らが健常学生と共に学生生活を送るためには，健常学生にそのような部分を理解してもらうことや，場合によっては支えてもらうことが必要となる。このため，そのような部分を開示し，周囲に援助を求めるような行動も弱視学生にとっては重要と考える（関西弱視者懇話会, 1990; 弱視者問題研究会, 2009; 中野, 2006; Glover-Graf et al., 2003; Roberts & Macan, 2006）。それにも関わらず，弱視学生の中には，援助を求める必要性を理解しつつも，障害の否定的側

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
** 筑波大学大学院人間総合科学研究科（障害科学系）

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

面が周囲に意識されてしまうことや，周囲が援助に消極的反応を示すことを危惧するが故に，障害開示に抵抗を示し，日常生活で周囲に援助を求められずにいる者も多い（弱視者問題研究会, 2007, 2009; 中野, 2006; Glover-Graf et al., 2003)。このため，このような状況の中で，どのような援助内容が，健常学生にとっては気軽な（あるいは, 気の重い）援助かを明らかにしておくことは弱視学生が周囲に援助を求める上で必要な知見であろう。なぜならば，目が見えにくいことからくる援助と言っても，その内容はさまざまであるからである（弱視者問題研究会, 2007, 2009; 日本学生支援機構, 2009a, 2009b; 鳥山, 2005, 2007)。

ところで，このような弱視学生が健常学生に援助を求めるような行為は，心理学の領域では援助要請（Help-seeking）と呼ばれている（DePaulo, 1983; 水野・石隈, 1999; 田村・石隈, 2002)。これに対して，援助要請を受けた健常学生が弱視学生に援助を提供するような行為は援助行動（Helping behavior）と呼ばれおり，「外的報酬や返礼を目的とせず，自発的に行われた，他者に利益をもたらす行動」と定義されている（松井・浦, 1998; 高木, 1998)。そして，この援助者が援助行動を遂行するか否かについては，援助要請する状況要因，援助内容要因，個人要因等の諸要因によって影響をうけることが報告されている（高木, 1998)。

このため，援助要請を行う弱視学生の場合もこれらの要因を考慮する必要があるが，状況要因についてみると，どのような場合においても，弱視学生が必要とする援助は移動や読み書きに関する援助内容が中心となっている（弱視者問題研究会, 2007, 2009; 中野, 2006; 日本学生支援機構, 2009a, 2009b; 鳥山, 2005, 2007)。例えば，移動に関わる援助内容を要請することは，弱視学生が教室移動に困難を示す状況やサークルの仲間と待ち合わせが困難な状況でも必要であり，読み書きに関わる援助内容を要請することは，弱視学生が授業内のプリント記入に困難を示す状況や授業外で事務処理が困難な状況でも必要である（中野, 2006; 鳥山, 2005, 2007)。そこで，本研究においては状況要因を省き，移動や読み書きといった援助内容要因に焦点を当てることにした。

一方，個人要因の影響についてみると，障害学生に対する健常学生の援助行動には性別，接触経験, 希望職種の変数が報告されているため，弱視学生でもこれらの変数について検討をすることが必要である。

例えば，性別の変数の影響についてみると，女子の方が男子よりも障害を開示して，援助要請をする視覚障害学生に対して関心や理解を示すため，親しみやすく，交流しやすいという報告があるものの（相羽・河内, 印刷中; 冨田・相羽・河内, 2010)，男子の場合は「社会的に弱い立場の人に援助的でなければならない」という弱者救済規範意識を強く持っているため（松井・浦, 1998; 箱井・高木, 1987)，そのような対象に援助しやすいという報告があり，異なる結果となっている。このため，この点については検討を行う必要がある。

接触経験の変数の影響についてみると，障害学生との交友関係を持つ健常学生は交流の際によく配慮ができるのに対し（山口, 2007)，視覚障害学生との交流経験がない者は，それがある者よりも視覚障害学生との交流に抵抗を感じており，援助にも意欲的でないという報告がなされている（冨田ら, 2010)。同様の結果は弱視学生を含む障害者を対象とした複数の研究でもみられている（河内, 2004, 2006; 妹尾・高木, 2003; Scott, 1969; 高木・玉木, 1998; 山口, 2007)。

希望職種の変数の影響については，福祉職や医療職等の対人支援職（以後，支援職）を目指す学生は前述した弱者救済規範意識を強く持つため（大西・辻丸・藤島・占部・大岡・末崎・福山, 2008)，援助しやすいことが考えられる。これについては，支援職を目指す学生は臨床実習の前後でも援助意識が変化しないという報告や（柴田・高橋・鹿村, 2007)，教員志望の学生が学校で困難を感じている学生に対してアドバイスや相談にのる等の様々な援助行動を展開すると

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

いう報告がある（岸田・藤田, 2008）。

以上のことから，弱視学生の場合にも，これらの変数が何らかの影響を持つことが考えられる。特に，視覚障害学生との接触経験を持つ者はそうでない者よりも援助がしやすく，支援職を希望する者はそうでない者よりも援助がしやすいということが予測できる。しかしながら，これらの結果は弱視者への援助と言う一次元的な内容についての予測であり，前述したように，援助内容には移動や読み書きといった複数ものが想定されるため，援助内容の次元性を確認した上で，個人要因が健常学生の援助行動に影響するかを明らかにする必要があると考えられる。

そこで，本研究では，移動と読み書きの異なる援助内容からなる質問項目に基づいて，援助内容の次元性を解明した上で，抽出された援助内容において弱視学生から援助要請を受けた健常学生の弱視学生に対する援助遂行可能性（援助を遂行できる程度）に及ぼす個人要因（性別・接触経験・希望職種）の影響について明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方　法

1．調査参加者と実施手続き

1）調査参加者：2007年11月から2009年1月の間に，首都圏内にある大学の授業（全学対象の共通科目5コマ, 心理・福祉系科目4コマ）を履修する学生のうち，調査協力の同意が得られた280名（男子110名, 女子170名）を調査参加者とした。参加者の平均年齢は20.32歳（SD=1.36）であった。

2）調査手続き：調査に当たっては，まず，援助要請を行う弱視学生の障害の程度を統制するために，先行研究（相羽・河内, 印刷中）を参考に作成した弱視学生の見え方に関する説明文を参加者に提示した（Table 1）。次に，調査実施者は「ここに書かれている学生はみなさんと同性，同学年，初対面です。このような人に出会ったことを想定して質問紙に回答してください」と教示した。

Table 1　弱視学生の見え方に関する説明文

見た目ではわからないかもしれませんが，実は，生まれた時から私には「視覚障がい」があります。視覚に「障がい」があるといっても，全く見えない訳ではなく，少しは見えている「弱視」という状態です。今から，そんな私の見え方についてお話をします。

私の視力は0.1程度です。何かを見たり読んだりするときは，顔の前まで引き寄せないと見分けることが難しい状態です。ただ，皆さんと違って，どんなメガネやコンタクトを使っても見え方はほとんどよくなりません。また，いつでも眼が揺れてしまうので，実際はこの視力よりももう少し見えにくい状態です。見える範囲や色の見え方など，その他には異常はありません。

日常生活で，私は白い杖を使わず，皆さんと同じように歩いています。しかし，足元がよく見えないので小さな段差によくつまずいています。また，私には皆さんが苦労をせずに読んでいる大学の掲示板，お店のメニュー，そして，ディスプレイの値段などはいくら近づいても見えません。また，人の顔も手の届く範囲まで近づかないと区別できません。私にとって皆さんに見えるものは大きくしないと見えないものばかりです。

大学生活でも不便なことがあります。例えば，私には普通の文字が小さくて読めません。ですので，教科書やプリントの文字は拡大したり，レンズを使って拡大したりしながら読んでいます。また，板書の文字は単眼鏡（望遠鏡）やビデオカメラを使って読んでいます。ただ，いくら大きくしても皆さんと同じ速度で文字が読めることはありません。また，目が疲れやすいので，すぐ文字が揺れて見えるようになります。長時間見ていると目が痛くなったり，頭が痛くなったりもします。ですから，板書が多い授業では，ノートを取るのに困っています。

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

2．調査紙（援助要請質問紙）

本質問紙は，学生生活で弱視学生が援助要請する主な援助内容に対する健常学生の意識を測定するために，従来から視覚障害者にとって最も必要だとされる援助内容として移動と読み書きを設定した（弱視者問題研究会, 2007, 2009; 日本学生支援機構, 2009a, 2009b; 鳥山, 2005, 2007）。このうち，移動に関する内容は大学生活で弱視学生が移動に困難を示し，誘導や検索などの援助を要するものであり，読み書きに関する内容は大学生活で弱視学生が読み書きに困難を示し，文字の読み上げや説明，代筆などの援助を要するものとした。これらの援助内容について，当事者への面接並びに先行研究から項目を収集した。当事者への面接では，調査者本人が大学院を修了した弱視者３名に半構造化的面接を実施した。質問内容は，上記の２つの援助内容において，彼らが障害を説明し，援助を求めた経験を尋ねるものであった。これにより83の項目（移動に関する内容31項目，読み書きに関する内容52項目）が収集された。また，先行研究については，既存の文献資料（芳賀, 1999; 芳賀・松森, 2004; 弱視者問題研究会, 1990, 2000, 2007; 関西弱視者懇話会, 1990; 小林, 2003; 共用品推進機構, 2000, 2001; 小川, 2007）に基づいて，115項目（移動に関する内容49項目，読み書きに関する内容66項目）を収集した。上記の手続きで収集した項目が各内容に適合しているか否かを検討するため，第一基準に，各場面で当事者と文献資料の両方に含まれている項目，第二基準に２名以上の弱視者が挙げた項目を設け，これらの基準を満たした項目を選出した。そして，それぞれの項目が各援助内容に合ったものであるかについて，大学教員２名と大学院生２名に検討を依頼し，全員の判断が一致した項目を質問紙に採用した。これにより，移動（13項目）と読み書き（12項目）に関する援助内容について，健常学生の援助行動に対する意識を評定する形式の援助要請質問紙が作成された。

なお，各質問項目に対する評定尺度は，このような場面で弱視学生に対して援助が「できない」の１から「できる」の５までの５件法とした。

3．個人要因

弱視学生に対する健常学生の援助行動に関連する個人要因として，性別（男・女），視覚障害者との接触経験（あり・なし），将来の希望職種（一般職：一般企業，事務職員等・支援職：福祉・医療専門職，教員）を尋ねた。なお，視覚障害者との接触経験を持つ者は90名，持たない者は190名であり，希望職種については支援職希望者が100名，一般職希望者が180名であった。

Ⅲ．結　果

1．援助要請の因子構造

援助要請質問紙に含まれる２つの援助内容の因子構造を確認するために，援助要請質問紙に含まれる25項目について共通性の推定値をSMCとして反復推定を行う主因子法因子分析を行った。この結果，固有値１以上の因子が３つ検出された。これらの固有値をみると，第Ⅰ因子は8.46（寄与率：33.86%），第Ⅱ因子は1.14（寄与率：4.56%），第Ⅲ因子は1.03（寄与率：4.14%）であった。第Ⅱ因子と第Ⅲ因子の固有値が同程度であったことから，これら３因子を因子として採用し，プロマックス法による斜交回転を行った（Table 2）。因子負荷量0.400以上の項目を各因子の代表項目として選んだところ，第Ⅰ因子は10項目，第Ⅱ因子は８項目，第Ⅲ因子は３項目となった。項目内容から各因子を解釈すると，第Ⅰ因子は，10項目中９項目が移動に設定した項目であり，健常学生が弱視学生を誘導したり，対象物を弱視学生に近づけたりと，移動に関する援助内容が多いことから（例：a2項目, a4項目），移動援助因子と命名した。第Ⅱ因子は，８項目中６項目が読み書きに選択した項目であり，弱視学生が見たり，読んだりする作業を，健常学生が時間を設け，一緒になって援助する内容が多いことから（例：b1項目，b4項目），読み援助因子と命名した。そして，第Ⅲ因子については，３項目全てが読

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Table 2 援助要請質問紙の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	共通性	*Mean*	*SD*
第1因子：移動援助因子						
a1 コンパで行ったお店が暗すぎて，トイレの場所がわからないため，誘導してほしいと頼まれた場合	.746	-.140	.091	.519	4.58	.62
a2 教室の空いている席がわからないので，空いている席まで誘導してほしいと頼まれた場合	.667	-.051	.101	.479	4.62	.64
a3 授業中，黒板に書かれた班割りが見えないので，班の場所まで誘導してほしいと頼まれた場合	.617	.077	.075	.497	4.56	.68
a4 大学の立食パーティーで，どこに料理があるかわからないため，代わりにお皿にとって来てほしいと頼まれた場合	.607	.188	.023	.553	4.26	.80
a5 駅の料金表が遠すぎて見えないので，切符を代わりに買ってほしいと頼まれた場合	.597	-.081	.113	.377	4.68	.61
a6 水溜りが見分けにくく，踏んでしまうことがあるので，踏まなくてすむ道を一緒に歩いてほしいと頼まれた場合	.495	.261	-.053	.427	4.30	.79
a7 混雑している駅では，後からついていくのが大変なので，肘か肩をかしてほしいと頼まれた場合	.474	.259	.032	.456	4.43	.82
a8 板書の文字が小さくて書き写せないため，ノートを貸してほしいと頼まれた場合	.453	.141	-.020	.288	4.44	.80
a9 授業を受ける教室の場所がわからないので，一緒に連れていってほしいと頼まれた場合	.412	.389	-.034	.482	4.26	.81
a10 授業後に集める感想文の提出先が学科別で区別できないため，代わりに提出してほしいと頼まれた場合	.410	.124	-.032	.227	4.48	.77
第2因子：読み援助因子						
b1 課題図書を早く読まなければならないため，対面朗読をしてほしいと頼まれた場合	-.127	.736	.125	.536	3.17	1.09
b2 クラス会の集合場所がわからないため，迎えに来てほしいと頼まれた場合	.103	.718	-.069	.565	3.72	.98
b3 読みたい本のタイトルを見分けることができないため，図書館で代わりに本を借りてきてほしいと頼まれた場合	-.011	.601	.140	.449	3.59	1.00
b4 履修便覧の文字が小さすぎて読めないため，時間割づくりを手伝ってほしいと頼まれた場合	.232	.478	.090	.477	3.96	.87
b5 サークルでポスターの色塗りがきちんとできないため，仕事を代わってほしいと頼まれた場合	.065	.445	.091	.287	3.80	1.05
b6 授業関連の掲示板が遠すぎて読めないため，内容をメールでそのまま送ってほしいと頼まれた場合	-.111	.436	.336	.359	3.88	1.00
b7 普通サイズの文字では読めないので，あなたがゼミで発表する資料を拡大してほしいと頼まれた場合	.329	.428	-.056	.417	4.18	.84
b8 欲しい物を探し出すのに時間がかかるため，買い物を手伝ってほしいと頼まれた場合	.063	.419	.187	.328	3.83	.92
第3因子：代筆援助因子						
c1 事務に提出する書類の枠が小さくて記入できないため，代筆をしてほしいと頼まれた場合	-.011	.174	.713	.643	4.06	1.01
c2 出席カードが小さすぎて書けないので，代筆してほしいと頼まれた場合	.176	-.107	.659	.501	4.53	.82
c3 授業中，プリントの記入欄が小さすぎて記入できないので，代筆をしてほしいと頼まれた場合	.031	.013	.619	.411	4.21	.85
除外された項目						
d1 コピー機のモニターが見にくいため，代わりに教科書の拡大コピーをとってほしいと頼まれた場合	.235	.159	.257	.286	4.26	.82
d2 画面が小さくて見えないため，コンビニのATMでお金を代わりに引き出してほしいと頼まれた場合	.017	.196	.236	.145	3.10	1.33
d3 クラス会の帰りに，最寄り駅までの行き方がわからないので，連れていってほしいと頼まれた場合	.379	.385	-.041	.432	4.03	.88
d4 体調が悪いのに，近くにある病院がわからないため，連れていってほしいと頼まれた場合	.182	.376	-.139	.200	3.78	.98

因子間相関	因子1	因子2	因子3
因子1	-	.576	.479
因子2		-	.460
因子3			-

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Table 3　各下位尺度における平均値と標準偏差及び分散分析の結果

		男子		女子		主効果			1次交互作用			2次交互作用
		一般職	支援職	一般職	支援職	性別	接触	職種	性別×接触	性別×職種	接触×職種	性別×接触×職種
尺度	接触	*Mean (SD)*				*F*値						
移動援助尺度	あり	46.31(3.72)	45.85(3.96)	45.34(4.45)	47.12(3.47)	4.12*	11.43**	1.08	3.25	1.77	0.003	0.12
	なし	42.59(5.68)	42.67(6.58)	44.49(4.73)	45.87(3.54)							
読み援助尺度	あり	35.69(5.00)	37.08(5.47)	34.77(5.58)	36.77(4.83)	1.46	11.70**	3.12	3.93*	0.28	0.14	0.02
	なし	31.84(6.62)	32.40(6.04)	33.82(5.74)	35.45(4.93)							
代筆援助尺度	あり	12.75(2.11)	13.69(1.32)	13.17(2.11)	14.15(1.05)	6.80**	10.98**	6.35*	1.18	0.11	0.63	0.16
	なし	11.59(2.84)	12.30(1.84)	12.87(2.17)	13.16(1.55)							

注1 N=男性：110(経験あり：29, 経験なし：81, 一般：67, 支援：43) N=女性：170(経験あり：61, 経験なし：109, 一般：113, 支援57)
注2 接触経験は接触として，希望職種は職種として表示

み書きに設定した項目のうち，代筆に関わる内容であり，弱視学生が自力で記入できない書式に，健常学生が代筆を行う内容が多いことから（例：c1項目，c2項目），代筆援助因子と命名した。

なお，各因子の因子間相関は，移動援助因子と読み援助因子が0.576，移動援助因子と代筆援助因子は0.479，読み援助因子と代筆援助因子は0.460であった。

2．援助要請質問紙の尺度構成

各因子を代表する3つの暫定尺度に含まれる項目の等質性と内的一貫性を検討するため，暫定尺度ごとに主成分分析とCronbachのα信頼性係数の算出を行った。なお，等質性については，第Ⅰ主成分に対する負荷量が0.400以上であること，内的一貫性については，Cronbachのα信頼性係数が0.600以上であること，これらの基準に基づき信頼性の検討を行った（松井，2006）。

1）移動援助：分析の結果，第Ⅰ主成分の固有値は4.67，寄与率は46.74%であった。第Ⅰ主成分に対する10項目の負荷量は全て0.54以上で，Cronbachのα信頼性係数の値は0.86であった。

2）読み援助：第Ⅰ主成分の固有値は4.17，寄与率は46.39%であった。第Ⅰ主成分に対する9項目の負荷量は全て0.58以上で，Cronbachのα信頼性係数の値は0.85であった。

3）代筆援助：第Ⅰ主成分の固有値は2.01，寄与率は67.09%であった。第Ⅰ主成分に対する3項目の負荷量は全て0.79以上で，Cronbachのα信頼性係数の値は0.75であった。

全暫定尺度が前述した基準を満たしていたため，各援助内容について，健常学生の援助遂行可能性を測定するための援助要請尺度として，移動援助尺度・読み援助尺度・代筆援助尺度の3下位尺度を構成した。

3．各援助内容における健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の検討

弱視学生が要請する3つの異なる援助内容（移動援助・読み援助・代筆援助）に対する健常学生の援助遂行可能性が，どのような個人要因（性別・接触経験・希望職種）によって影響されるかを検討するため，下位尺度ごとに各項目の総和を尺度得点として算出し，その平均値と標準偏差を個人要因別に求め，それぞれについて，性別，接触経験，希望職種の2×2×2からなる多元配置分散分析を行った（Table 3）。

1）移動援助尺度：まず，性別の有意な主効果が見出され（$F(1,279)=4.12, p<.05$），移動援助得点は女子の方が男子よりも有意に高いことが示された。次に，接触経験についても有意な主効果が見出されており（$F(1,279)=11.43, p<.01$），接触経験のある者の方がそうでない者よりも有意に移動援助得点が高いことが示された。しかし，希望職種については，有意な主効果は見出されなかった（$F(1,279)=1.08$, n.s.）。なお，交互作用は有意ではなかった。

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

2）読み援助尺度：接触経験の有意な主効果が見出されたが，性別と接触経験の間に1次交互作用も見られたため（$F(1,279)=3.93, p<.05$），これらについて単純主効果の検討を行った。

まず，性別の要因における単純主効果の検討では，接触経験のない者の男女間にのみ有意な差が見出され（$t(188)=2.58, p<.05$），接触経験のない者の中では，女子が男子よりも有意に読み援助得点が高いことが示された。一方，接触経験の要因における単純主効果の検討では，男子にのみ，接触経験のある者と接触経験のない者との間に有意な差が見出されており（$t(108)=3.23, p<.01$），男子では接触経験のある者が接触経験のない者よりも有意に読み援助得点が高いことが示された。

3）代筆援助尺度：まず，性別の有意な主効果が見出され（$F(1,279)=6.80, p<.01$），女子の方が男子よりも有意に代筆援助得点が高いことが示された。次に，接触経験についても有意な主効果が見出されており（$F(1,279)=10.98, p<.01$），接触経験のある者の方がそうでない者よりも有意に代筆援助得点が高いことが示された。また，希望職種についても，有意な主効果は見出され（$F(1,279)=6.35, p<.05$），支援職を希望する者は一般職を希望する者よりも有意に代筆援助得点が高いことが示された。なお，交互作用は有意ではなかった。

Ⅳ．考　察

1．援助内容の因子構造について

本研究では，学生生活で弱視学生が要請する援助内容に対する健常学生の援助意識の構造を解明するため，援助の機会が多いと推察される移動と読み書きの援助内容を設定し，これらを代表する25項目への回答に因子分析を適用した。その結果，移動に分類した項目のほとんどは，移動に関わる因子に含まれており，移動援助が独立した援助内容であることが示された。これは肘や肩をかす（a7項目）とか，誘導する（a1項目）といった行為が，ひとりで移動ができる健常学生にとって未経験の内容であり，日常的に経験している読み書きに関わる内容とは異なるためと推察される。なぜならば，健常者は経験したことがなく，どうしたらよいかわからないような援助については遂行しにくいことが見出されているからである（内閣府，2007）。

一方，当初，読み書きに分類した項目は読むことに関する因子と，代筆に関する因子とに区別された。そこで，それぞれの因子内容を見てみると，読み援助では，時間割作りを手伝うとか（b4項目），掲示板の内容をメールしてもらう（b6項目）といった読みに関する内容が中心であるものの，クラス会に一緒に行ってもらう（b2項目）というような健常学生が仲間と行う対人行動も含まれており，援助内容であるにしても，榎本（1999, 2000）が指摘する活動のうち，相手と同じ行動や趣味を持つ親密行動を反映したものとも解釈できる。

これに対し，代筆援助では，事務書類や出席カードの代筆（c1項目，c2項目）をしてもらう内容を含んでいる。この援助を遂行するには，健常学生が弱視学生からプライベートな情報を教えてもらわなければならないことが想定される。しかし，一般的には，連絡先や成績などのプライベートな情報を親しくないものに示すことは容易ではなく，出会ってまもない人にそのような情報を開示した場合には否定的な印象を与える可能性も高くなる（榎本, 1997; 中村, 2003; 高木, 1992）。このため，援助を目的としたとしても，健常学生がどこまで関われるかの判断に悩む援助内容とも言える。

以上の結果から，移動と読み書きからなる弱視学生が必要とする援助内容は，その作業内容の違いや，援助内容が健常学生にとって身近であるか否かといった問題と関連し，移動援助・読み援助・代筆援助という異なる性質の援助として区別することが妥当であろう。したがって，弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性を検討する場合には，上記の3援助内容ごとに検討することが必要であろう。

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

2．各援助内容における健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果

本研究では，弱視学生の異なる援助内容についての援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性が，どのような個人要因によって影響されるかを解明するため，本研究で作成した3下位尺度（移動援助，読み援助，代筆援助）の尺度得点を従属変数に，性別，接触経験，希望職種を独立変数とした多元配置分散分析を行った。

1）性別の影響について：性別が健常学生の援助遂行可能性に与える影響については，交互作用が有意でなかった移動援助尺度と代筆援助尺度において有意な主効果が見出された。また，交互作用が有意な読み援助尺度については，単純主効果において，視覚障害者との接触経験のない男女間にのみ有意差が見出された。

いずれの場合も，女子の方が男子よりも援助遂行可能性が有意に高かった。このような性別の影響は視覚障害者に対する態度や自己効力感に関する研究においても見出されている（河内, 2004; 河内・四日市, 1998）。また，本研究の結果は，障害を開示し，周囲に積極的に援助要請をする視覚障害学生に対して，女子の方が男子よりも関心や理解を示すため，親しみやすく，交流しやすいという先行研究の結果とも一致している（相羽・河内, 印刷中; 河内, 2006; 冨田ら, 2010）。従って，女子の方が概して視覚障害者を受け入れやすい傾向にあることが推測される。このようなことから，初対面で同性の弱視学生から援助要請を受ける場合には，概ねどの援助内容においても女子の方が男子よりも援助に積極的であることが推察される。これは援助者の性役割において，英雄的で勇ましい援助をすべきという性役割を持つ男子に対し，養育的で世話的な援助をすべきという性役割を持つ女子は，困難を抱える子供への援助，ボランティア，教育支援を好むためと考えられる（東, 1997; Eagly & Crowley, 1986; 高木, 1998）。例えば，本研究で用いた項目は，「コンパで行ったお店が暗すぎて，トイレの場所がわからないため，誘導してほしいと頼まれた場合」（移動援助尺度），「課題図書を早く読まなければならないため，対面朗読をしてほしいと頼まれた場合」（読み援助尺度），「出席カードが小さすぎて書けないので，代筆してほしいと頼まれた場合」（代筆援助尺度）など，どの援助内容においても，危険性は低く，身体的努力を要する援助でもなかった。このため，性役割に合致した援助内容を要請された女子の方が援助を遂行しやすかったと考えられる。

なお，接触経験のある男女間で有意差が見られなかったことについては，接触経験の影響が考えられるため後述することとしたい。

2）接触経験の影響について：接触経験が健常学生の援助遂行可能性に与える影響については，交互作用が有意でなかった移動援助尺度と代筆援助尺度において有意な主効果が見出された。また，交互作用が有意な読み援助尺度については，単純主効果において，男子にのみ接触経験のある者とない者の間に有意差が見出された。

いずれの場合も，接触経験のある者がない者よりも援助遂行可能性の高いことが明らかとなった。このような接触経験の効果は多くの先行研究とも一致する結果である（河内, 2004, 2006; 妹尾・高木, 2003; Scott, 1969; 高木・玉木, 1998; 冨田ら, 2010; 山口, 2007）。これは，接触経験を持つ者が，そうでない者よりも視覚障害者との交流に戸惑わないで接することができるためと推察できる。なぜなら，視覚障害者のような“Stranger”との遭遇においては，接触経験のない者はその対象と「どう接すればよいか」を知らないがために，対象との交流に戸惑いを感じたり，交流そのものを回避したりするのに対し（内閣府, 2007），接触経験のある者は，接触対象の反応をある程度予測できることから，見通しを持って交流できるため，援助しやすかったと推察される（Fichten, Robillard, & Sabourin, 1994）。山口（2007）は障害学生と交友関係を持つ健常学生は交流の際に配慮がよくできると指摘しているが，本研究でも，視覚障害者との接触経験を持つ者はそうでない者より関わり方

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

を理解していたことから，弱視学生に肘や肩を貸して誘導したり，書類の記入を手伝ったりすることができると判断したと推察される。

ただし，読み援助において，男子にしかこのような接触経験の効果が見られなかったのは，元来，女子は男子よりも言葉的課題が得意なため（川上, 1982），概して女子は読み援助に抵抗がなかったと推察される。例えば，女子は読書課題や携帯メールによるコミュニケーションに好意的であり，積極的に取り組むが，男子はそれらに抵抗を示しやすいと報告されている（枝澤, 2005; 黒角・深田, 2005）。本研究で用いた読み援助尺度項目の中にも，対面朗読（b1項目）やメールをする（b6項目）などの男子には抵抗を感じやすい言語的活動が含まれているため，男子には援助しにくい内容であったとも解釈できる。このような援助内容であったため，援助を促進するのに役立つ接触経験のある男子の方が，相対的には，接触経験のない男子よりも援助を遂行しやすかったのではないかと考えられる。

3）希望職種の影響について：健常学生の希望職種が彼らの援助遂行可能性に与える影響については，代筆援助尺度だけに有意な主効果が見出され，将来，支援職を希望する者の方が一般職希望者よりも援助遂行可能性が有意に高いことが示された。これは，代筆援助で特徴的となっているプライベートな情報開示について一般職希望者には抵抗があったためと推察される。なぜならば，開示内容が対人関係に及ぼす効果を検討した研究の多くが，よりプライベートな情報を親密でない相手に開示することは，迷惑とか，不適切な行為として相手から評価されると報告しており（榎本, 1997; 中村, 2003; 高木, 1992），援助を目的としたとしても，一般職を希望する健常学生にとっては，そのような情報の扱いに困惑した可能性の高いことが推察されるからである。これに対し，支援職を希望する者の方が一般職希望者よりも援助を遂行しやすいというのは，彼らが弱者救済規範を強く持っていて，プライベートな情報であっても，援助するために必要であれば，その行為を受け入れたと考えられるからである（大西ら, 2008: 柴田ら, 2007）。また，彼らはそのような情報を適切に扱うための倫理教育を受けているために（今西・山本・山田, 2007），そのような情報の取り扱いに抵抗が少ないことも関係していると推察される。

以上の結果を総括してみると，次のようにまとめられる。

(1) 弱視学生から要請された援助内容に対する健常学生の意識構造は，移動援助，読み援助，代筆援助の多次元構造をしている。このことから，弱視学生の求める援助内容によって健常学生の援助遂行可能性も異なることが推察される。従って，今後弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性を検討する場合には援助内容ごとに検討することが必要である。

(2) 弱視学生が要請する3つの援助内容における個人的要因の影響については，従来どおり女子の方が男子よりも援助遂行可能性が高く，援助内容の違いにはほとんど関係がなかった。同様の傾向は接触経験でも見られており，どの援助内容においても視覚障害者との接触経験のある者はそうでない者よりも，援助が遂行しやすかった。これに対し，希望職種の場合は，代筆援助でしか影響が見られないことから，援助内容を区別したことの意義が明らかとなった。

今後の課題としては，本研究の知見に基づき，弱視学生が援助を求める上でどのような工夫が必要かを明らかにするため，各援助内容においてどのような援助要請の方法が効果的であるかを検討していく必要があると考えられる。

付　記

本論文は，相羽大輔が筑波大学大学院人間総合科学研究科の平成21年度中間評価論文としてまとめたものを，平成22年度～24年度の科学研究費（基盤研究　(C) No. 22531055）の：「障害学生支援における援助意欲向上方略としての障害開示条件に関する包括的研究」の研究の一環として，河内清彦教授の指導の下，再編集，

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

再分析したものである。相羽が研究に専念できたのは，視覚障害学生奨学金（SVI-SJ）によるところが大であり，CWAJ（College Women's Association of Japan）に深謝の意を表する。

文　献

相羽大輔・河内清彦（印刷中）弱視学生に対する健常学生の交流抵抗感に及ぼす障害開示の効果について. 特殊教育学研究.

東清和（1997）ジェンダー心理学の研究動向—メタ分析を中心として—. 教育心理学年報, 36, 156-164.

DePaulo, B, M.（1983）Perspectives on help-seeking. In DePaulo, B, M., Nadler, A., & Fisher, J, D., (Eds), New Directions in helping. Volume, 2, Help-seeking, New York: Academic press, pp3-12.

Eagly, A. H., & Crowley, M.（1986）Gender and helping behavior: A Meta-Analytic review of the social psychological literature. Psychological Bulletin, 100 (3), 283-308.

枝澤康代（2005）日本人大学生の外国語習得に見られる異文化受容と性差. 同志社女子大学総合文化研究所紀要, 22, 64-74.

榎本博明（1997）自己開示の心理学的研究. 北大路書房.

榎本淳子（1999）青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化. 教育心理学研究, 47(2), 180-190.

榎本淳子（2000）青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究, 48(4), 444-453.

Fichten, C. S., Lennox, H., Robillard, K., Wright, J., Sabourin, S., & Amsel, R.（1996）Attentional focus and attitudes toward peers with disabilities: Self focusing and a comparison of modeling and self-disclosure. *Journal of Applied Rehabilitation Counseling*, 27(4), 30-39.

Fichten, C. S., Robillard, K., & Sabourin, S.（1994）The attentional mechanisms model of interaction strain, *Journal of developmental and physical disabilities*. 6(3), 239-254.

Glover-Graf, N., Janikowski, T. P., & Hadley, M.（2003）Rehabilitation counseling student disclosure of disability and use of educational accommodations. *Rehabilitative Education*, 17, 224-236.

芳賀優子（1999）. 弱視OL奮闘記—私, まっすぐ歩いてます—. 一橋出版.

芳賀優子・松森果林（2004）. ゆうことカリンのバリアフリーコミュニケーション. 小学館.

箱井英寿・高木修（1987）援助規範意識の性別, 年代, および, 世代間の比較. 社会心理学研究, 3(1), 39-47.

Huvelle, M. F., Budoff, M., & Arnholz, D.（1984）To tell or not to tell: Disability disclosure and the job interview. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 78, 241-244.

今西誠子・山本多香子・山田豊子（2007）倫理的な能力の向上に向けて（4）:「看護学実習記録に関する確認書」「看護学実習記録に関する誓約書」を用いたことの効果. 京都市看護短期大学紀要, 32, 123-130.

弱視者問題研究会（編）（1990）働く弱視者100人アンケート報告書. 身体障害者定期刊行物協会.

弱視者問題研究会（編）（2007）弱視者いろはカルタ. 大活字.

弱視者問題研究会（編）（2009）私の見え方紹介カード第二版. 弱視者問題研究会.

関西弱視者懇話会（1990）弱視者アンケート報告書. 関西弱視者懇話会.

川上正澄（1982）男の脳女の脳. 紀伊国屋書店.

河内清彦（2004）障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52, 437-447.

河内清彦（2006）障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度, 友人関係, 援助行動, ボランティア活動を中心に—. 教育心理学研究, 54, 509-521.

河内清彦・四日市章（1998）感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する検討 教育心理学研究, 46, 106-114.

岸田麻里・藤田正（2008）大学生の学習援助行動における学習者情報の影響. 教育実践総合センター研究紀要, 17, 129-136.

小林一弘（2003）視力0.06の世界—見えにくさのある眼で見るということ—. ジアース教育新社.

黒角健太・深田博己（2006）携帯電話・携帯メールコミュニケーションに及ぼす性と性役割の影響. 広島大学心理学研究, 5, 69-92.

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

共用品推進機構（編）（2000）弱視者不便さ調査報告書—見えにくいことによる不便さとは—. 共用品推進機構 視覚情報障害班.

共用品推進機構（編）（2001）弱視の人に出会う本. 小学館.

Madaus, J. W., Foley, T. E., McGuire, J. M., & Ruban, L. M.（2002）Employment self-disclosure of post-secondary graduates with learning disabilities: rates and rationales. *Journal of Learning Disabilities*, 35, 364-369.

松井豊（2006）心理学論文の書き方. 河出書房新社.

松井豊・浦光博（編）（1998）対人行動学研究シリーズ7—人を支える心の科学—. 誠信書房.

水野治久・石隈利紀（1999）被援助志向性，被援助行動に関する研究の動向. 教育心理学研究, 47(4), 530-539.

内閣府（2007）障害者に関する世論調査. 内閣府大臣官房政府広報室.

中村雅彦（2003）対人魅力の形成. 西日本法規出版.

中野泰志（2006）高等教育機関（大学・大学院・短期大学など）でのロービジョンケア. 高橋宏（編）, ロービジョンケアの実際—視覚障害者のQOL向上のために—第2版. 医学書院, 217-221.

日本学生支援機構（2009a）平成20年度（2008年度）大学・短期大学及び高等学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査結果報告書. 日本学生支援機構.

日本学生支援機構（2009b）教職員のための障害学生修学支援ガイド. 日本学生支援機構.

小川明浩（2007）視力3cm—それでも僕は東大に—. グラフ社.

大西良・辻丸秀策・藤島法仁・占部尊士・大岡由佳・末崎政晃・福山裕夫（2008）. 精神保健福祉援助実習における実習生の援助観の遷移—援助規範と援助イメージの測定から— 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要, 15(1), 47-55.

Roberts, L. L., & Macan, T. H.（2006）Disability disclosure effects on employment interview ratings of applicants with nonvisible disabilities. *Rehabilitation Psychology*, 51, 239-246.

Scott, R. A.（1969）. The making of blind men. New York: Russell Sage Foundation.

妹尾香織・高木修（2003）援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果. 社会心理学研究, 18(2), 106-118.

柴田和恵・高橋ゆかり・鹿村真理子（2007）看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連—臨地実習前後の比較—. 天使大学紀要, 7, 85-92.

高木浩人（1992）自己開示行動に関する認知と対人魅力に関する研究—密接な関係と密接でない関係の比較—. 実験社会心理学研究, 32, 60-70.

高木修（1998）人を助ける心—援助行動の社会心理学—. サイエンス社.

高木修・玉木和歌子（1998）. 視覚障害者に対する援助行動—援助行動と質と認知の差異—. 関西大学社会学部紀要, 30(1), 69-94.

田村修一・石隈利紀（2002）中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連. 教育心理学研究, 50(3), 291-300.

冨田朝未・相羽大輔・河内清彦（2010）全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果. 障害科学研究. 34, 55-65.

鳥山由子（監）・青松利明（編）・石井裕志（編）・青柳まゆみ（編）（2005） 視覚障害学生サポートガイドブック—進学・入試から卒業・就職までの実践的支援ノウハウ—. 日本医療企画.

鳥山由子（2007）視覚障害指導法の理論と実際—特別支援教育における視覚障害教育の専門性—. ジアース教育新社.

山口利勝（2007）中途失聴者と難聴者に対する援助行動と関連する要因の研究. 社会福祉学, 48(1), 55-67.

—— 2010.8.31 受稿、2010.12.27 受理 ——

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

J. J. Disa. Sci. 35, 7－18, 2011

The effects of personal characteristics of students without disabilities on their reactance to help-seeking behavior of peers with partial sight

Daisuke AIBA* and Kiyohiko KAWAUCHI**

The purposes of the present study were to examine the effects of personal characteristics of students without disabilities on their reactance to help-seeking behavior of peers with partial sight. After showing profile of studens with partial sight, nondisabled college students (N = 280) answered a questionnaire based on support of the mobility or reading and writing that asked about help-seeking behaviors of students with partial sight. Factor analysis revealed 3 factors which are the support of mobility, reading and writing. This was shown to be multidimensional support contents. Analysis using ANOVA revealed that gender and contact with visually impaired people significantly influenced the subscales of all. The female score of all subscales was higher than the male one. And students who has some contact with visually impaired people were more favorable than other students on all subscale score. On the other hand, occupations they hope significantly influenced the writing subscales. Students who wanted to be a support staff were more favorable than other students on writing subscale score.

Key words: disability disclosure, help-seeking behavior, students with partial sight, nondisabled college students

* Graduate course of Disability Sciences, University of Tsukuba

** Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Institute of Disability Sciences, University of Tsukuba

NII-Electronic Library Service